

国 語

一

出典 橋本陽介『「文」とは何か』(光文社 2020年)

言語が私たちの思考を決定するのか否かについて論じた箇所からの出題です。具体例も多く、文意を把握するのはそれほど難しくはないでしょう。

問1【漢字の書き取り・読みの問題】(解答番号は①～⑦)

正答は次の通りです。

a 起点(基点)、b 封筒、c かつしよく、d 雑然、e 指針、f すぐ、g 親和性

「親和性」を「神話性」とする誤答が散見されました。同音異義語を含めて文脈から適切な読み書きをすることが肝要です。全問正答率は38%でした。

問2【空欄補充・前後の文脈から適語を選ぶ問題】(解答番号は⑧)

正答は④です。空欄Ⅰの直前が「もし～なら」と条件節になっていることがヒントとなります。正答率は67%でした。

問3【空欄補充・前後の文脈から適語を選ぶ問題】(解答番号は⑨)

正答は⑦です。正答率29%と芳しくありませんでした。空欄Ⅱの直前の「人間である以上、色は言語にかかわらず」と直後の「同じように見えている」という文脈から正答を導くことはさほど難しくはないはずですが、①と⑤を選択した誤答がそれぞれ36%と32%ありましたが、どちらも文脈にそぐいません。

問4【空欄補充・前後の文脈から適語を選ぶ問題】(解答番号は⑩)

正答は③です。正答率は83%であり、空欄Ⅲが「カテゴリー」の言い換えであることを、多くの受験生が適切に読解できていました。

問5【空欄補充・前後の文脈から適切なものを選ぶ問題】(解答番号は⑪)

正答は⑥です。正答率は54%でした。②の選択率が39%でしたが、本文の冒頭ですからそれまでのキーワードと次段落との繋がりを押さえることが肝要です。

問6【空欄補充・前後の文脈から適切なものを選ぶ問題】(解答番号は⑫)

正答は②です。正答率は85%とよくできていました。

問7【空欄補充・前後の文脈から適切なものを選ぶ問題】(解答番号は⑬)

正答は③です。空欄ウの直前と次段落冒頭に「やはり」があることを考えれば、正答を導けるはずですが。正答率は78%でした。

問8【文脈把握と内容理解に関する問題】(解答番号は⑭)

正答は⑤です。正答率85%とよくできていました。②は「言語全般を調査した結果」という箇所が誤りです。

問9【言葉の意味に関する問題】(解答番号は⑮)

正答は①です。正答率は87%とよくできていました。

問10【文脈把握と内容理解に関する問題】（解答番号は16）

傍線部Cの「表現と直観」に着目すれば、正答②が導けるはずですが、①は「表現」レベルのみを問題としていること、③は「感覚的」、⑤は「逆転」という文言がそれぞれ誤りです。正答率は61%でした。

問11【文脈把握と内容理解に関する問題】（解答番号は17）

正答は③です。正答率は70%でした。17%と最も誤答率が高かった⑥については「日本人の誰もが」とまでは本文に書かれておらず、正答にはなりません。

問12【文脈把握と内容理解に関する問題】（解答番号は18）

正答は⑤です。正答率95%とほとんどの受験生が正答を選んでいました。

問13【内容を理解して小見出しの組み合わせを選択する問題】（解答番号は19）

正答⑤の正答率は44%でした。全受験生の26%が選択した①は、の小見出しとしては不適当です。

問14【内容合致問題】（解答番号は20）

正答は⑤です。正答率は55%でした。①は2行目の「のみ」、②は「異文化理解」が、③は「文化の多様性」が、⑥は「～言語学者が多数を占める」がそれぞれ誤りです。受験生の10%前後が選択していた④と⑧は、それぞれ「全人類に共通である」と「前者が言語を本能的なものとして捉え」が誤りです。

二

出典 網野善彦『中世的世界とは何だろうか』（朝日新聞出版 1996年）

古代からある日本の庭を、自然・神仏との関わりの中で捉えようとした文章です。聞き慣れない語が多数ありますが、用語に焦らず丁寧に押さえれば、難しい内容ではありません。

問1【漢字の書き取りの問題】（解答番号は21～26）

正答は次のとおりです。

a 観覧 b 審理 c 痕跡 d 徴収（徴集） e 金融 f 譲与

いずれも難しい漢字ではありませんが、b・cが書けていませんでした。新聞など活字に触れる中で漢字の練習をするようにしましょう。全問正答率は2%でした。

問2【空欄補充・前後の文脈から適切なものを選ぶ問題】（解答番号は27）

空欄の6行後にある『『芸能』を営む人々の活動』に着目する必要があります。正答は⑧です。正答率は34%でした。

問3【空欄補充・前後の文脈から適切なものを選ぶ問題】（解答番号は28）

空欄の5行前に「人々が共同で作業を行う広い場」とあります。ここを押さえる必要があります。正答は④です。正答率は82%でした。

問4【空欄補充・前後の文脈から適切なものを選ぶ問題】（解答番号は 29）

「上分」は「初尾」の別称であることが空欄 **ウ** の3行前で述べられています。「初尾」は神に捧げるものです。これらを踏まえると正答は③になります。正答率は52%でした。

問5【文脈把握と内容理解に関する問題】（解答番号は 30）

傍線部 **A** にある指示詞「これ」の内容と江戸時代における「御庭番」のあり方を説明している選択肢③が正答です。①は「高貴な人々の存在に起源がある」が、②は「善阿弥は庭の造園にも関わっていた」が、④は「江戸時代における『御庭番』の身分が高かった」が、⑤は「最高権威者に直結する場になったのは鎌倉時代」が、⑥は「最高権威者に政策などを意見する場になっていった」が、それぞれ間違いです。正答率は70%でした。

問6【文脈把握と内容理解に関する問題】（解答番号は 31）

傍線部 **B** にある「こうした『庭』の機能」の内容は、身分の低い人々が最高の権威者と接していたということです。また「古代の朝廷にまでさかのぼりうる」の内容が奈良時代のことであったということを押さえる必要があります。正答は④です。正答率は67%でした。

問7【文脈把握と内容理解に関する問題】（解答番号は 32）

古来、人々が初物を神に捧げていたことが、傍線部 **C** を含む節に記されています。この内容を押さえると、正答を導くことができます。正答は④です。①は「近世以降」が、②は「康安元年に記された祭文」が、③は「神に捧げるという共通認識を中世の人々が持っていた」が、⑤は「民俗語彙である『庭上げ』」が、⑥は「平安時代において」が、それぞれ間違いです。正答率は51%でした。

問8【文脈把握と内容理解に関する問題】（解答番号は 33）

傍線部 **D** は、「庭」が中世後期以降に「場」としての意味がなくなっていたことを意味しています。正答は⑤です。①は「共同組織や個人が次第に特定されるように」が、②は「文和年間に」が、③は「『庭』自体が一つの権利となり、国単位の万歳場の売買を行うように」が、④は「個人も次第に特定されるように」が、⑥は「『庭』を権力者の意向に添うように」が、それぞれ間違いです。傍線部の前後を丁寧に押さえることが大事です。正答率は51%でした。

問9【内容を理解して小見出しを選択する問題】（解答番号は 34）

本節の2段落目に「だれのものでもない」と記されています。これがヒントです。正答は③です。正答率は27%でした。

問10【内容合致問題】（解答番号は 35）

正答は③です。③以外の選択肢の間違った箇所はそれぞれ次の通りです。①「日本で定着するようになった室町時代において」、②「境神と武蔵の神々を同時に祭り」、④「『庭』はすでに百姓が権力者と会話する場としての『庭園』」、⑤「国単位の万歳場の売買の事実は中世末期までさかのぼる」、⑥「芸能の行われる場も『狩庭』『鞠庭』のようによばれた」、⑦「荒神様の前でともに食する地方」（本文では「荒神様に上げる地方」となっていることに要注意）、⑧「大極殿に出た天皇は百姓とともに」。正答率は32%でした。